Asian Party

アジアンパーティは、「アジアと創る」をコンセプトに、アジアの人、モノ、情報が集う社交場をイメージしています。

主要事業である「The Creators」,「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」、「福岡アジア文化賞」の三つを柱に、特別企画としてヤンゴン関連イベント「Yangon Pick」も開催。民間企業・団体等と連携し、全23事業で約57万人に参加いただきました。

アジアンパーティPRポスター

アジアフォーカス・福岡国際映画祭　2017.9.15 Fri - 24 Sun

The Creators　2017.9.9 Sat - 10 Sun

発行／福岡アジア文化賞委員会事務局
〒810-8620 福岡市中央区天神1−8−1　福岡市総務企画局国際部内
TEL 092-711-4930　FAX 092-735-4130
Email:acprize@gol.com　http://fukuoka-prize.org/

第28回 福岡アジア文化賞
FUKUOKA PRIZE 2017

報告書

主催　福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団
後援　外務省、文化庁

福岡アジア文化賞の受賞者

= 創設特別賞　= 大賞　= 学術研究賞　= 芸術・文化賞

★福岡

パキスタン
- 第7回 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン（カッワーリー歌手）
- 第17回 アクシ・ムフティ（民俗文化保存専門家）
- 第27回 ヤスミーン・ラリ（建築家・人道支援活動家）

ネパール
- 第15回 ラーム・ダヤル・ラケーシュ（民俗文化研究者）

インド
- 第2回 ラヴィ・シャンカール（音楽家・シタール奏者）
- 第5回 パドマー・スブラマニヤム（舞踊家）
- 第8回 ロミラ・ターパル（歴史学者）
- 第15回 アムジャッド・アリ・カーン（サロード奏者）
- 第18回 アシシュ・ナンディ（社会・文明評論家）
- 第20回 パルタ・チャタジー（政治学・歴史学者）
- 第23回 ヴァンダナ・シヴァ（環境哲学者）
- 第24回 ナリニ・マラニ（アーティスト）
- 第26回 ラーマチャンドラ・グハ（歴史学・社会学者）
- 第27回 A.R.ラフマーン（作曲家・作詞家・歌手）

アジア以外の国・地域

英国
- 第1回 ジョゼフ・ニーダム（中国科学史研究者）
- 第28回 クリス・ベーカー（歴史学者）

第28回大賞受賞者
クリス・ベーカー

アイルランド
- 第11回 ベネディクト・アンダーソン（政治学者）

オーストラリア
- 第5回 王 賡 武（歴史学者）
- 第13回 アンソニー・リード（歴史学者）
- 第24回 テッサ・モーリス＝スズキ（アジア地域研究者）

フランス
- 第20回 オギュスタン・ベルク（文化地理学者）

ドイツ
- 第22回 ニールズ・グッチョウ（建築史家・修復建築家）

米国
- 第2回 ドナルド・キーン（日本文学・文化研究者）
- 第3回 クリフォード・ギアツ（文化人類学者）
- 第6回 ナム・ジュン・パイク（ビデオアーティスト）
- 第9回 スタンレー・J・タンバイア（人類学者）
- 第21回 ジェームズ・C・スコット（政治学者・人類学者）
- 第25回 エズラ・F・ヴォーゲル（社会学者）

モンゴル
- 第4回 ナムジリン・ノロゥバンザト（声楽家）
- 第17回 シャグダリン・ビラ（歴史学者）

中国
- 第1回 巴 金（作家）
- 第4回 費 孝 通（社会学・人類学者）
- 第7回 王 仲 殊（考古学者）
- 第13回 張 芸 謀（映画監督）
- 第14回 徐 冰（アーティスト）
- 第15回 厲 以 寧（経済学者）
- 第17回 莫 言（作家）
- 第20回 蔡 國 強（現代美術家）
- 第28回 王 名（行政学者、NGO・市民社会研究者）

第28回学術研究賞受賞者
王 名

ブータン
- 第16回 タシ・ノルブ（伝統音楽家）

ミャンマー
- 第11回 タン・トゥン（歴史学者）
- 第16回 トー・カウン（図書館学者）
- 第26回 タン・ミン・ウー（歴史学者）

スリランカ
- 第13回 キングスレー・M・デ・シルワ（歴史学者）
- 第15回 ローランド・シルワ（文化遺産保存建築家）
- 第19回 サヴィトリ・グナセーカラ（法学者）

バングラデシュ
- 第12回 ムハマド・ユヌス（経済学者）
- 第19回 フォリダ・パルビーン（音楽家）

タイ
- 第1回 ククリット・プラモート（作家・政治家）
- 第5回 スパトラディット・ディッサクン（考古学・美術史学者）
- 第10回 ニティ・イヨウシーウォン（歴史学者）
- 第12回 タワン・ダッチャニー（画家）
- 第18回 シーサック・ワンリポードム（人類学・考古学者）
- 第23回 チャーンウィット・カセートシリ（歴史学者）
- 第24回 アピチャッポン・ウィーラセタクン（映画作家・アーティスト）
- 第28回 パースック・ポンパイチット（経済学者）

第28回大賞受賞者
パースック・ポンパイチット

インドネシア
- 第2回 タウフィック・アブドゥラ（歴史学者・社会科学者）
- 第6回 クンチャラニングラット（文化人類学者）
- 第9回 R.M.スダルソノ（舞踊家・舞踊研究者）
- 第11回 プラムディヤ・アナンタ・トゥール（作家）
- 第23回 クス・ムルティア・パク・ブウォノ（宮廷舞踊家）
- 第25回 アジュマルディ・アズラ（歴史学者）

香港
- 第19回 アン・ホイ（映画監督）
- 第25回 ダニー・ユン（文化クリエイター）

台湾
- 第10回 侯 孝 賢（映画監督）
- 第18回 朱 銘（彫刻家）

ラオス
- 第16回 ドアンドゥアン・ブンニャウォン（織物研究家）

ベトナム
- 第7回 ファン・フイ・レ（歴史学者）
- 第26回 ミン・ハン（ファッションデザイナー）

カンボジア
- 第8回 チェン・ポン（劇作家・芸術家）
- 第22回 アン・チュリアン（民族学者・クメール研究者）
- 第28回 コン・ナイ（吟遊詩人、チャパイ・マスター）

第28回芸術・文化賞受賞者
コン・ナイ

フィリピン
- 第3回 レアンドロ・V・ロクシン（建築家）
- 第12回 マリルー・ディアス＝アバヤ（映画監督）
- 第14回 レイナルド・C・イレート（歴史学者）
- 第23回 キドラット・タヒミック（映画作家）
- 第27回 アンベス・R・オカンポ（歴史学者）

マレーシア
- 第4回 ウンク・A・アジズ（経済学者）
- 第11回 ハムザ・アワン・アマット（影絵人形遣い）
- 第13回 ラット（マンガ家）
- 第19回 シャムスル・アムリ・バハルディーン（社会人類学者）

シンガポール
- 第10回 タン・ダウ（ビジュアルアーティスト）
- 第14回 ディック・リー（シンガーソングライター）
- 第21回 オン・ケンセン（舞台芸術家）

日本
- 第1回 黒澤 明（映画監督）
- 第1回 矢野 暢（社会科学者）
- 第2回 中根 千枝（社会人類学者）
- 第3回 竹内 實（中国研究者）
- 第4回 川喜田 二郎（民族地理学者）
- 第5回 石井 米雄（東南アジア研究者）
- 第6回 辛島 昇（歴史学者）
- 第7回 衞藤 瀋吉（国際関係研究者）
- 第8回 樋口 隆康（考古学者）
- 第9回 上田 正昭（歴史学者）
- 第10回 大林 太良（民族学者）
- 第12回 速水 佑次郎（経済学者）
- 第14回 外間 守善（沖縄学者）
- 第17回 濱下 武志（歴史学者）
- 第20回 三木 稔（作曲家）
- 第21回 毛里 和子（現代中国研究者）
- 第24回 中村 哲（医師）

韓国
- 第3回 金 元 龍（考古学者）
- 第6回 韓 基 彦（教育学者）
- 第8回 林 権 澤（映画監督）
- 第9回 李 基 文（言語学者）
- 第16回 任 東 権（民俗学者）
- 第18回 金 徳 洙（伝統芸能家）
- 第21回 黄 秉 冀（音楽家）
- 第22回 趙 東 一（文学者）

CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 …… 1・2
福岡アジア文化賞とは …… 3・4
第28回受賞者
大賞　パースック・ポンパイチット および クリス・ベーカー …… 5
学術研究賞　王名（ワン・ミン） …… 6
芸術・文化賞　コン・ナイ …… 7
授賞式 …… 8～12
市民交流事業
パースック・ポンパイチット および クリス・ベーカー …… 13
王名（ワン・ミン） …… 14
コン・ナイ …… 15
共催・協力企画
「アジアの未来を拓く 九州大学の挑戦」 …… 16
受賞者紹介および広報活動など …… 17
歴代受賞者名鑑 …… 18～22

福岡アジア文化賞とは

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバリゼーション時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、アジアのほぼ全域にわたり、多くの素晴らしい受賞者の功績を顕彰しています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1. 目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2. 賞の内容

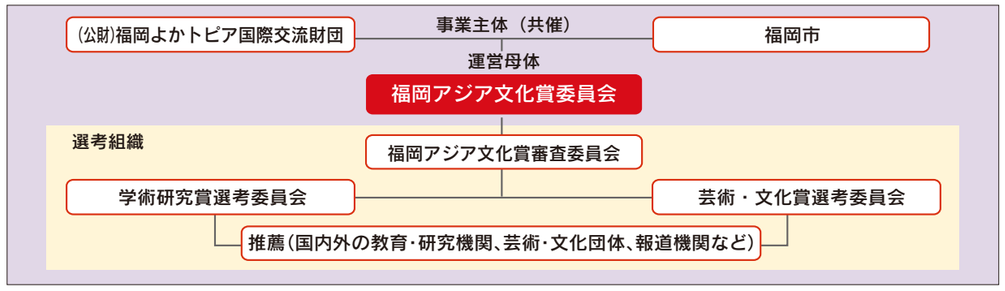
大　賞	学術研究賞	芸術・文化賞
賞金　¥5,000,000	賞金　¥3,000,000	賞金　¥3,000,000
アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人または団体を対象としています。	人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人または団体を対象としています。	アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人または団体を対象としています。

3. 対象圏域

東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4. 主催

福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団※



※福岡よかトピア国際交流財団：アジア太平洋博覧会―福岡’89の成功を記念するとともに、アジアに開かれた福岡の歴史、文化、その他の特性を生かした国際交流を促進する活動を行うことにより、市民一人ひとりが多様性を認め合いながら国際的な相互理解を深める多文化共生社会の実現に寄与し、地域の発展と国際平和に貢献することを目的としています。

第28回福岡アジア文化賞のあゆみ

2015.07	48か国・地域約7,000人に第27回、28回受賞候補者の推薦を依頼
2017.01～02	芸術・文化賞（1月29日）、学術研究賞（2月6日）各選考委員会にて、推薦された29か国・地域の受賞候補者189名4団体について選考
2017.02	審査委員会（28日）にて審査
2017.04	審査・選考合同委員会（29日）
2017.06	文化賞委員会（8日）にて4人の受賞者を承認
2017.09	受賞者紹介（20日）、授賞式（21日）、学校訪問（22日）、市民フォーラム（23日、24日）

福岡アジア文化賞委員会委員

2017年10月現在　50音順、敬称略

特別顧問	宮田　亮平	文化庁長官
〃	宮川　　学	外務省国際文化交流審議官
〃	小川　　洋	福岡県知事
名誉会長	髙島宗一郎	福岡市長
会　　長	礒山　誠二	（公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長
副 会 長	久保　千春	九州大学総長
〃	川上　晋平	福岡市議会議長
〃	貞刈　厚仁	福岡市副市長
監　　事	谷川　浩道	福岡市社会福祉協議会会長
〃	水町　博之	福岡市会計管理者
委　　員	荒牧　智之	九州電力株式会社代表取締役副社長
〃	石田　正明	福岡市議会副議長
〃	岩松　　城	毎日新聞社取締役西部本社代表福岡本部長
〃	江口　　勝	福岡県副知事
〃	加賀　　至	九州運輸局長
〃	唐池　恒二	九州旅客鉄道株式会社代表取締役会長
〃	川崎　隆生	西日本新聞社取締役会長
〃	久保田勇夫	株式会社西日本シティ銀行取締役会長
委　　員	熊谷　敦子	福岡市議会第1委員会委員長
〃	佐藤　靖典	福岡市レクリエーション協会副会長
〃	柴戸　隆成	株式会社福岡銀行取締役頭取
〃	城本　　勝	日本放送協会福岡放送局長
〃	髙橋　直人	九州経済産業局長
〃	竹島　和幸	西日本鉄道株式会社代表取締役会長
〃	多田　昭重	福岡文化連盟会長
〃	田中　優次	西部ガス株式会社代表取締役会長
〃	田村やよひ	日本赤十字九州国際看護大学学長
〃	中井　一平	読売新聞西部本社代表取締役社長
〃	橋本　　仁	朝日新聞社執行役員西部本社代表
〃	平岡　　啓	日本経済新聞社常務執行役員西部支社代表
〃	藤永　憲一	株式会社九電工代表取締役会長
〃	星子　明夫	福岡市教育委員会教育長
〃	山口　政俊	福岡大学学長
〃	山本　盤男	九州産業大学学長
〃	K.J.シャフナー	西南学院大学学長

第28回福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会

委 員 長／久保 千春
九州大学総長
福岡アジア文化賞委員会副会長

副委員長／貞刈 厚仁
福岡市副市長
福岡アジア文化賞委員会副会長

委　　員／石坂 健治
日本映画大学教授
東京国際映画祭プログラミング・ディレクター
芸術・文化賞選考委員会委員長

委　　員／後小路 雅弘
九州大学大学院人文科学研究院教授
芸術・文化賞選考委員会副委員長

委　　員／清水 展
関西大学特任教授、京都大学名誉教授
学術研究賞選考委員会委員長

委　　員／竹中 千春
立教大学法学部教授
学術研究賞選考委員会副委員長

委　　員／柄 博子
国際交流基金理事

委　　員／土屋 直知
株式会社正興電機製作所
代表取締役会長

福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞

委 員 長／清水 展
関西大学特任教授
京都大学名誉教授

副委員長／竹中 千春
立教大学法学部教授

委　　員／天児 慧
早稲田大学大学院
アジア太平洋研究科教授

委　　員／木宮 正史
東京大学大学院
総合文化研究科教授

委　　員／河野 俊行
九州大学大学院法学研究院教授

委　　員／清水 一史
九州大学大学院経済学
研究院教授

委　　員／新田 栄治
鹿児島大学名誉教授

委　　員／脇村 孝平
大阪市立大学大学院
経済学研究科教授

福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞

委 員 長／石坂 健治
日本映画大学教授
東京国際映画祭
プログラミング・ディレクター

副委員長／後小路 雅弘
九州大学大学院
人文科学研究院教授

委　　員／内野 儀
学習院女子大学
日本文化学科教授

委　　員／宇戸 清治
東京外国語大学名誉教授

委　　員／小西 正捷
立教大学名誉教授

委　　員／寺内 直子
神戸大学大学院
国際文化学研究科教授

委　　員／西村 幸夫
東京大学大学院
工学系研究科教授

委　　員／松隈 浩之
九州大学
芸術工学研究院准教授

2017年10月現在　50音順、敬称略

第28回 大賞 受賞者

パースック・ポンパイチット *Pasuk PHONGPAICHIT*

タイ／経済学（1946年生まれ）

クリス・ベーカー *Chris BAKER*

英国／歴史学（1948年生まれ）

主な経歴

パースック・ポンパイチット

1946　タイ、パトゥムターニー生まれ
1969　オーストラリア、モナシュ大学卒業(経済学) (コロンボ・プラン奨学金)
1971　タイ、チュラロンコーン大学経済学部講師
1978　英国、ケンブリッジ大学博士号(経済学)
1980-84　国際労働機関(ILO) 専門職員(開発経済学)
1988-89　シンガポール、東南アジア研究所(ISEAS)研究員
2004-　タイ、チュラロンコーン大学経済学部教授 (2012- 名誉教授)
2001-13　ジョンズ・ホプキンス大学(米国)、グリフィス大学(オーストラリア)、京都大学東南アジア研究所、ワシントン大学(米国)、東京大学社会科学研究所、政策研究大学院大学(GRIPS)にて客員教授を歴任
2016-　Royal Society of Thailand　アソシエート・フェロー

クリス・ベーカー

1948　英国、ランカシャー生まれ
1969　英国、ケンブリッジ大学卒業(歴史学)
1973　英国、ケンブリッジ大学博士号(歴史学)
1975-79　英国、ケンブリッジ大学クイーンズカレッジ歴史学科長、研究員
1980-97　RDR Bangkok調査部長、Lintas Thailand and Singapore社長、Riche Monde Thailandマーケティング部長を歴任
2003-13　国連開発計画(UNDP) Thailand Human Development Report, 2003, 2009, 2011, 2013編集者
2009-　Journal of the Siam Society 名誉編集者

主な受賞歴

パースック・ポンパイチット

1992　第4回アジア・太平洋賞特別賞(主催：毎日新聞社・アジア調査会)(『日本のアセアン投資：その新しい潮流』にて)
1999　アムステルダム、W. F. Wertheim Memorial Lecturer
2001　モナシュ大学、名誉校友
2009　タイ研究財団、特別教授賞
2011　バンコクポスト、現代タイで影響力のある女性65人

パースック・ポンパイチットおよびクリス・ベーカー（共同受賞）

1997　タイ国家学術調査委員会Best Book of the Year (*Thailand: Economy and Politics*)
2002　アメリカ図書館協会Outstanding Book of the Year (*Thailand's Crisis*)
2013　アジア研究協会A.L.ベッカー東南アジア文学翻訳賞(*The Tale of Khun Chang Khun Phaen*にて)

贈賞理由

パースック・ポンパイチット氏とクリス・ベーカー氏は、1980年代から急速に経済発展してきたタイの社会変動を、東洋と西洋の知性の協働、社会科学と人文科学の融合、男女の感性の共鳴をとおして複眼的で総合的な視点から分析し、様々な境界を自在に超えて学術研究の対象と方法に新たな展開と深化をもたらしてきた。共著書は10冊を超え、国際的に活躍する知識人である。

パースック氏とベーカー氏の功績は数多くあるが、最大の貢献は、現代タイ社会が直面する数々の問題を、政治と経済を中心に、社会や文化、人々の価値意識にまで広げて、多面的かつ総合的に捉えようとした点である。例えば、1990年代前半の経済のバブル化を扱った『Thailand's Boom!（タイのバブル）』（1996年）は、政治と経済の動きだけでなく、株や土地の投機に狂奔する人々や、新しい消費文化や若者の流行も取り上げ、当時のタイ社会の実態を生き生きと描いた。そして、1997年のアジア通貨危機でタイ経済のバブルが崩壊するや、直ちに『Thailand's Boom and Bust（タイのバブルと破綻）』（1998年）を刊行して、バブル崩壊の過程を克明に描き、2000年には、『Thailand's Crisis（タイの危機）』を上梓して、いち早くタイ経済危機の背景を分析し、進行中の経済改革の内容を紹介した。

パースック氏はケンブリッジ大学で経済学を学び、現代タイ経済の実証分析を1980年代から始めた。一方、ベーカー氏はケンブリッジ大学でインド亜大陸の歴史に取り組む気鋭の研究者だった。その後、パースック氏の帰国が決まると、ベーカー氏は大学の教職を辞し、彼女と共にバンコクに移り住む。以後、経済問題はパースック氏、芸能や文化はベーカー氏、政治問題は両者でといった、絶妙の分業と協力の関係を育んだ。政治と経済、社会と文化を有機的な全体として捉える複眼的な分析は、パースック氏とベーカー氏の編み出した学際的でユニークな手法である。タイの現代政治をビジネスの観点から分析した『Thaksin（タクシン）』（2004年）も、こうした協働作業によって生まれた傑作である。

パースック氏とベーカー氏はそのほかにも現代タイ社会に関する優れた著作を多数発表している。都市中間層、インフォーマルセクター、通貨危機後のタイ人資本家、経済的不平等の拡大、環境と社会運動などがテーマであり、いずれも鋭い問題意識と豊富な実証データに支えられた、現代のタイを理解するための好著である。

パースック氏とベーカー氏の協働作業で忘れてはならない業績は、新しい時代の教科書を意識して書かれた『A History of Thailand（タイの歴史）』（2005年）と、19世紀半ばから現在に至るタイの経済と政治を俯瞰した『Thailand: Economy and Politics（タイ：経済と政治）』（1995年。邦訳『タイ国－近現代の経済と政治－』［2006年］）の2冊であろう。この2冊は、タイ研究者のみならず、東南アジアを研究する者にとっても、必読の文献となっている。

さらにもうひとつの偉大な業績は、タイでもっとも親しまれている長編叙事詩『The Tale of Khun Chang Khun Phaen（クンチャーン・クンペーン物語）』の韻文からの英訳である。この叙事詩の成立は遅くとも1840年代で、ラーマ2世王やタイの詩聖と呼ばれるスントーン・プーも参加した。ラーマ5世王の時代以前に使用されていた古語で書かれているだけでなく、古来インドなどの影響を受けてきた宮廷と庶民双方の生活や慣習、文化についての該博な歴史知識がない限り、英語への全訳は相当に難しいと言われてきた。それを成し遂げることができたのは、若い頃にインド史の専門であったベーカー氏の教養と、パースック氏・ベーカー氏のタイ社会に関する博識によるところが大である。

両氏の共同研究は傑出しており、タイの代表的知識人として多大の社会的貢献をしてきたパースック・ポンパイチット氏とクリス・ベーカー氏は、まさに「福岡アジア文化賞 大賞」にふさわしい。

第28回 学術研究賞 受賞者

王 名（ワン・ミン） *WANG Ming*

中国／行政学、NGO・市民社会研究（1959年生まれ）

主な経歴

1959　中国、新疆ウイグル自治区ウルムチ市生まれ
1983　蘭州大学卒業 (経済学)
1983-85　西安政治学院経済学部助手
1988　中央党校修士号 (世界経済学)
1988-92　中央党校経済学部講師
1997　名古屋大学博士号 (国際開発学)
1998-　清華大学21世紀発展研究院副教授、清華大学NGO研究センター所長
2000-　清華大学公共管理学院副教授
2001-06　清華大学公共管理学院教授、副院長
2003-　第10、11、12回中国政治協商会議全国委員
2004-　香港理工大学客員教授、中国赤十字協会理事、国務院民生部専門委員
2005-　マカオ理工大学客員教授
2006-　中国障害者基金会副理事長
2007-　『中国非営利評論』(中文・英文) 編集長
2012-　明徳公益研究センター理事長
2013-　国務院政府機能改革評価委員会委員
2014-　中国社会組織促進会副会長
2015-　中国社会ガバナンス研究会副会長
清華大学公益慈善研究院教授、院長

主な受賞歴

2013　責任中国2013公益盛典組織委員会 (広州) 公益思想賞
2014　中国慈善年会組織委員会 (北京) 慈善推動者賞

主な著作

『**中国NGO研究-以案例为中心** (中国NGO研究-ケーススタディー)』(主編),北京:UNCRD(国際連合地域開発センター), 2000.
『**中国NGO研究-以案例为中心** 2001』(主編),北京:UNCRD, 2001.
『**中国社团改革-从政府选择到社会选择**(中国社団改革-政府選択から社会選択へ)』(共著), 北京:社会科学文献出版社, 2001.
『**中国のNPO-今、社会改革の扉が開く**』(共著),東京:第一書林,2002.
『**非营利组织管理概论** (非営利組織管理概論)』北京:中国人民大学出版社, 2002.
『**中国非政府公共部门**(中国非政府公共セクター)』(主編),北京:清華大学出版社, 2004.
『**民间组织通论**(民間組織通論)』(共著), 北京:時事出版社, 2004.
『**中国公共管理案例** (中国公共管理ケーススタディー)』(共著), 北京:清華大学出版社, 2005.
『**德国非营利组织** (ドイツの非営利組織)』(共著), 北京:清華大学出版社, 2006.
『**日本非营利组织** (日本の非営利組織)』(共著), 北京:北京大学出版社, 2007.
『**中国民间组织30年-走向公民社会** (中国民間組織30年間-公民社会へ向かって)』(主編), 北京:社会科学文献出版社, 2008.
『**汶川地震公民行动报告** (四川大地震公民行動報告)』(主編), 北京:社会科学文献出版社, 2009.
『**英国非营利组织**(英国の非営利組織)』(共著),北京:社会科学文献出版社,2009.
『**非营利组织管理概论(修订版)** (非営利組織管理概論(修正版))』北京:中国人民大学出版社, 2010.
Emerging Civil Societyin China, 1978 - 2007(主編),ボストン:BrillPress,2011.
『**中国 NGO 口述史(第一辑)** (中国 NGO 口述史(第一部))』(主編)北京:社会科学文献出版社, 2012.
『**美国非营利组织**(米国の非営利組織)』(共著),北京:社会科学文献出版社, 2012.
『**建言者说** (政策提言者の提言)』北京:社会科学文献出版社, 2013.
『**社会组织论纲** (中国 NGO 論)』北京:社会科学文献出版社, 2013.
『**社会组织与社会治理** (社会組織と社会ガバナンス)』(共著), 北京:社会科学文献出版社, 2014.
『**中国NGO口述史(第二辑)**(中国NGO口述史(第二部))』(主編), 北京:社会科学文献出版社,2014.
『**香港非营利组织** (香港の非営利組織)』(共著)北京:社会科学文献出版社, 2015.
『**非营利组织管理** (非営利組織管理)』(共著), 北京:中国人民大学出版社, 2016.
『**我行我素** (私の歩み、私の素食)』北京:北京聯合出版公司, 2016.
『**建言者说(第二辑)**(政策提言者の提言(第二部))』北京:社会科学文献出版社, 2017.
A Discussion on Chinese Road of NGOs: Reform and Co-Governance by Society, ベルリン:Springer Nature,2017.

贈賞理由

王名氏は、中国の経済発展とともに関心を集めてきたNGO（非営利の非政府組織）研究、環境ガバナンス研究の第一人者である。留学していた日本から帰国後、1998年に清華大学の教職につき、ほぼ同時期、中国で初めてのNGO研究センターを立ち上げた。NGO研究とは1990年代以降生まれてきた様々なNGOを対象に、その活動や組織、ネットワーク、政策及び制度作りなどを研究し、安定した市民社会の形成を目指した学問であり、氏はこの新たな分野を切り開いた先駆者である。

王氏は、1959年にウルムチ市で生まれ、1983年に蘭州大学経済学部を卒業。1992年に来日し、福井大学、京都大学で学んだ後、1994年に名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程に入学し1997年に博士号を取得した。1998年、清華大学NGO研究センターを創設、初代所長に就任した。また赤十字協会理事（2004年－）、障害者基金会副理事長（2006年－）、明徳公益研究センター理事長（2012年－）などの要職を歴任し、社会問題の解決、市民活動、市民社会の充実に努めている。さらに公益慈善（Philanthropy）の研究を開拓し深め、2015年に清華大学公益慈善研究院の創立に尽力し、院長に就任した。

王氏のこのような社会活動を学術的に支えてきたのが、同僚および若手研究者などと頻繁に行ってきたフィールド調査である。それらの成果は、氏主編のシリーズ『中国NGO研究―ケーススタディー』、『四川大地震公民行動報告』などに見られる。最近では、中国NGOの代表的なリーダー約100名の聞き書き調査・研究を行い、その成果は、『中国NGO口述史（オーラルヒストリー）』（第一部2012年、第二部2014年）として出版された。これらは今後の中国におけるNGO研究、活動の学問的基盤となる。

王氏はまた、国際的なNGO研究を中国に取り入れ、より客観的、社会科学的な学問にすべく、この十数年間、ドイツ、日本、英国、米国、香港など各国・地域の非営利組織の状況を視察し、フィールド調査をベースにまとめた5冊の著作（『ドイツの非営利組織』『日本の非営利組織』『英国の非営利組織』など）を出版している。これらの学術活動が、中国におけるNGO研究の水準を飛躍的に高めたことは言うまでもない。

同時に、清華大学のNGO研究センターおよび公益慈善研究院における教育活動は多くの若手研究者の育成に多大な貢献をなしている。王氏自身もそうであるが、氏の下で育った若手研究者も少なからず日本の大学に留学し、NGO研究、市民社会研究を行い、それらの専門家として活躍するようになっている。氏は日中の人的交流の緊密さが咲かせた大輪であり、教育者としての功績も高く評価されている。

中国の深刻化する環境問題、感染症問題などの様々な分野で、日本と中国は相互に協力関係を築いていくことになるだろう。そのような中で王氏の行ってきたこれまでの学術的、教育的功績はまさに日中協力の促進に重要な役割を果たしてきたと言えよう。

以上のように王名氏の功績はまことに顕著であり、まさに「福岡アジア文化賞 学術研究賞」にふさわしい。

コン・ナイ *KONG Nay*

カンボジア／音楽（1944年生まれ）

主な経歴

1944	カンボジア、カンポット州生まれ
1948	天然痘を患い、4歳で失明
1957	叔父からチャパイ演奏、リアムケー（サンスクリット語のラーマヤナに基づくカンボジア叙事詩）を教わる
1959	故郷の村でチャパイ奏者として初めての演奏
1970年代	クメール・ルージュが政治プロパガンダに利用しようとするが、歌詞で抵抗 キリング・フィールドから家族と生還
1991-2007	カンボジア、文化芸術省チャパイ奏者
2003-12	プノンペンのカンボジアン・リビング・アーツで後進の指導にあたる
2010	世界人権デーを祝し、国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）に協力し「Our Rights」および「Woman」（共作：カンボジアン・スペース・プロジェクト）制作
2011	TEDxプノンペン（テーマ：未来の構築）オープニングにて演奏

主な受賞歴

1982 最初のチャパイコンクールおよびカンポット州のチャパイコンクール優勝
1991 プノンペンのチャパイコンクール優勝
2001 カンボジア、文化芸術省よりチャパイ・マスター認証
フン・セン首相よりカンボジア文化への貢献によるグランド・オフィサー(Grand Officer of Cambodia Cultural Reputation)
2002 カンボジア、文化芸術大臣よりチャパイの技認証
2007 フン・セン首相よりカンボジア文化への貢献によるゴールド・グランド・クロス(Gold Grand Cross of Cambodia Cultural Reputation)
2013 Cambodian First Step Organizationより認証

主な海外公演

2007 WOMAD (World of Music, Arts and Dance) 2007（英国、ウィルトシャー）
2008 WOMAD New Zealand 2008（ニュージーランド、ニュープリマス）
WOMADelaide 2008（オーストラリア、アデレード）
2009 音の世界遺産 #4 コン・ナイ（東京）
2013 シーズン・オブ・カンボジア・フェスティバル（米国、ニューヨーク）
2015 藝大21 藝大アーツ・スペシャル2015 障がいとアーツ(東京)

CD作品

A Cambodian Bard（INEDIT/Maison des Cultures du Monde, 2006）
Mekong Delta Blues（Long Tale Recordings, 2007）※カンボジアン・スペース・プロジェクト のオウチ・サヴィー共演
The Rough Guide to Psychedelic Cambodia（World Music Network, 2014）※カンボジアン・スペース・プロジェクト ＆コン・ナイとして参加

贈賞理由

コン・ナイ氏は、内戦とポル・ポト時代の弾圧を奇跡的に生き延び、今も活発に演奏・作曲活動を続けているカンボジアの伝説的吟遊詩人である。チャパイ・ダン・ヴァンという頸の長い弦楽器を弾きながら、古代インドの「ラーマーヤナ」に基づくカンボジアの一大叙事詩「リアムケー」の朗誦の他、日常の出来事、人々の感情、教訓、社会風刺までさまざまな事象を取り上げ、豊かな表現で謳いあげる。この音楽は、2016年にユネスコの「緊急に保護する必要がある無形文化遺産の一覧表」に登録され、カンボジア人だけでなく、世界の人々の心に深く響く優れた芸能として、価値が認識された。氏はその貴重な伝承者である。現在、その活躍の場は、カンボジア国内はもとより、イギリス、オーストラリア及びニュージーランド（以上、WOMAD 2007 - 08年）、日本（音の世界遺産「コン・ナイ」[2009年]、「障がいとアーツ」[2015年]）、アメリカ（シーズン・オブ・カンボジア・フェスティバル[2013年]）などへの出演にも広がっている。また、『A Cambodian Bard』(2006年)、『Mekong Delta Blues』(2007年)、『The Rough Guide to Psychedelic Cambodia』(2014年)などのCDによっても、多くの人にチャパイ弾き語りの魅力を発信している。2010年の世界人権デーでは、女性の権利を謳った新曲「Woman」を披露した。

コン・ナイ氏は、1944年、カンボジア南部のカンポット州の小さな村で生まれた。4歳の時天然痘で失明し、13歳から叔父についてチャパイを習い始め、音楽家となった。無差別に大量虐殺が行われた1970年代後半のポル・ポト時代を奇跡的に生き延び、その後も内戦が続いたにもかかわらず、演奏活動に復帰した。1982年にチャパイのコンクールで優勝し、さらに地元カンポット州のコンクール、プノンペンのチャパイコンクール（1991年）でも優勝し、1991年から2007年にかけて母国の平和構築と文化復興のために文化芸術省の職員としてチャパイの演奏に従事した。2001年には文化芸術省によって「チャパイ・マスター」（日本の人間国宝に相当）に認定され、NPO団体カンボジアン・リビング・アーツの支援によるプログラムなどで次世代のチャパイ奏者の育成に取り組んできた(2003 - 12年)。

チャパイ弾き語りによく似た芸能として、日本には盲僧琵琶や平家琵琶の伝統があるが、旋律、歌詞両面において、チャパイ音楽の方が即興性が高い。民衆を飽きさせないため、当意即妙に歌詞を替えたり旋律を変奏するのである。そのためには作詞のための教養と知性や卓越した音楽性と技術が求められる。コン・ナイ氏の最近の活動には、ロックとの共演（プノンペン、世界人権デー 2010のイベント）、ジャズとの共演（シーズン・オブ・カンボジア・フェスティバル）、オーケストラとの共演（東京藝術大学、「障がいとアーツ」）などがあるが、伝統的なレパートリーの中で培われた即興能力が、こうした他ジャンルとの刺激的な協奏を可能にする柔軟性を育んだのだろう。

このように、コン・ナイ氏は、カンボジアの多難な歴史を生き抜き、貴重な伝統音楽・チャパイの弾き語りを現代に伝える優れた伝承者として、演奏、作曲、後継者育成、さらに国連の人権活動や障がい者支援の催しへの協力など、多彩な活動をグローバルに展開してきた。その貢献は、まさに「福岡アジア文化賞　芸術・文化賞」にふさわしい。

第28回福岡アジア文化賞 授賞式

■日時：9月21日（木）18：30～20：00　■会場：アクロス福岡 福岡シンフォニーホール

式　次　第

18：30 オープニング・パフォーマンス　福岡市少年少女合唱団

【第1部】受賞者紹介
主催者代表挨拶　福岡市長　髙島 宗一郎
お言葉　秋篠宮殿下
選考経過報告　福岡アジア文化賞審査委員会委員長　久保 千春
贈賞　福岡市長　髙島 宗一郎
(公財)福岡よかトピア国際交流財団理事長　礒山 誠二

【第2部】祝賀演奏　九大フィルハーモニー・オーケストラ
受賞者挨拶とインタビュー
受賞者演奏　コン・ナイ氏
祝賀演奏　筑前琵琶演奏家　寺田 蝶美 氏

20：00 閉式

第28回福岡アジア文化賞　授賞式

第28回福岡アジア文化賞授賞式は、歴代受賞者が映像で紹介された後、福岡市少年少女合唱団による美しいハーモニーで幕を開けました。

秋篠宮同妃両殿下ご臨席のもと、カンボジア、中華人民共和国、タイ、英国、ベトナム社会主義共和国のご来賓、各界関係者、多くの市民がステージに注目します。受賞者がステージに姿を現すと、拍手がひと際大きくなりました。晴れやかな中にも温もりのある雰囲気は、ホスピタリティマインドにあふれた福岡市らしい、また市民が贈る賞にふさわしいものです。

最初に主催者を代表して髙島宗一郎福岡市長が登壇。賞の意義とその精神を伝え、この賞によってアジア地域の人々の交流がより一層深まり、文化振興と相互理解、平和への貢献につながっていくよう祈念して挨拶を結びました。

続いて秋篠宮殿下より先の九州北部豪雨へのお見舞いと受賞者へのお祝いのお言葉を賜りました。審査委員長の久保千春九州大学総長より選考経過が報告された後、受賞者へ贈賞。賞状とメダルが授与され、観客から大きな拍手が送られると、緊張した面持ちだった受賞者の顔に笑みがこぼれました。福岡インターナショナルスクールの子どもたちからもお祝いの花束が贈られました。

第2部は、100年以上の歴史を持つ九大フィルハーモニー・オーケストラによる『ディヴェルティメントニ長調ケッヘル136より第1楽章』（モーツァルト作曲）の演奏で幕開け。受賞者による喜びのスピーチが行われ、コン・ナイ氏はこの日のために作曲した『福岡での受賞式に向けて』という曲を披露してくださいました。最後に、筑前琵琶奏者の寺田蝶美氏による『平家物語　那須与一』が演奏され、言語やハンディキャップの壁を越えて誰もが楽しめる、またお祝いの席にふさわしい華やかな式となりました。

オープニングパフォーマンス

髙島福岡市長による
主催者代表あいさつ

久保九州大学総長による
選考経過の報告

大賞のバースック・ボンバイチット氏とクリス・ベーカー氏への贈賞

学術研究賞の王名氏への贈賞

芸術・文化賞のコン・ナイ氏への贈賞

花束贈呈

九大フィルハーモニー・オーケストラによる祝賀演奏

コン・ナイ氏によるチャパイ演奏

筑前琵琶奏者・寺田蝶美氏による祝賀演奏

祝賀会

授賞式に引き続いて各国の来賓、各界関係者など多数の参加者による祝賀会を開催。礒山誠二福岡よかトピア国際交流財団理事長が「みなさんと受賞の喜びを分かち合い、心温まるひとときを過ごしましょう」と挨拶。続いて、来賓を代表して、チア・キムター カンボジア大使がお祝いの言葉を述べ、石田福岡市議会副議長による乾杯でスタート。

受賞者や同伴者を囲んで、和やかな祝賀会となりました。

礒山理事長による主催者代表あいさつ

チア・キムター カンボジア大使による
来賓あいさつ

石田福岡市議会副議長による乾杯

秋篠宮殿下お言葉

はじめに、ここ福岡県において7月の九州北部豪雨により甚大な被害が生じ、亡くなられた方々に深く哀悼の意を表しますとともに被災された方々にお見舞いを申し上げます。本日、福岡アジア文化賞の授賞式に先立ち、朝倉市を訪ね、被災地を視察し、また被災された方々にお目にかかりました。改めて被害の深刻さを痛感するとともに、被災地の復興が進み、もとの平穏な暮らしが戻ることを切に願っております。

本日、第28回福岡アジア文化賞の授賞式に皆様とともに出席できましたことを誠にうれしく思います。そして受賞される4名の方々に心からお祝いを申し上げます。

世界的にグローバル化が進展する近年、私たちはその利便性をさまざまな面で享受しております。しかし、その一方では、画一化、均一化された思考方法や生活様式が広まっていることも指摘されるようになり、それぞれの国や地域が有する固有の文化やその多様性の重要性への認識が高まってまいりました。そしてその土台のもとに新たな文化の創造にも多くの努力が重ねられております。私自身、東南アジアを中心にアジア諸国を訪れる機会がたびたびあり、多様な風土や自然環境が作り出し、長い期間に渡って育まれてきた各地固有の歴史や言語、民俗など、文化の深さや豊かさに関心を持つとともに、それらを保存継承していくことの大切さを強く感じております。

28回目を迎える福岡アジア文化賞は古くからアジア各地で受け継がれている多様な文化を尊重し、その保存と継承に貢献するとともに新たな文化の創造、そしてアジアに関わる学術研究に寄与することを目的として、それらに功績のあった方々を顕彰するものであり、大変意義深い賞であるといえましょう。その意味において本日の受賞者の優れた業績は、アジアのみならず広く世界に向けてその意義を示し、また社会全体でこれらを共有することによって後世へと引き継ぐ人類の貴重な財産になることと考えます。

終わりに、受賞される皆様に改めて祝意を表しますとともに、この福岡アジア文化賞を通じてアジア諸地域に対する理解、そして国際社会の平和と友好がいっそう促進されていくことを祈念し、私のあいさつといたします。

受賞者あいさつ

大賞　パースック・ポンパイチットおよびクリス・ベーカー

違いを認め尊敬しあって生まれる研究への相乗効果は賞の精神に相通じるもの

秋篠宮同妃両殿下、ご来賓の皆様、そして友人の皆様、栄えある賞をいただいたことを大変誇りに思います。これまでの研究が認められたからというより、この賞の目指す世界観の素晴らしさから受賞を誇らしく思うのです。

日本との出会いは、私たちに多くの実りをもたらしました。1981年にタイ政府視察団と一緒に福岡を訪れた時は一村一品運動を視察し、1999年に二人で訪れた際には京都大学東南アジア研究所とのご縁ができました。以後、客員教授として京都大学や東京大学、政策研究大学院大学に籍を置かせていただきました。1992年から参加している日タイセミナーでは、2年に1度、意見交換を行っています。

夫婦での受賞は初めてだとか。それも大変誇りに思います。私たちの場合1＋1＝2でなく、もっと大きな数字になります。性、国、民族、学問における違いが相乗効果を生んでいるのでしょう。

世界が大きく変化し、不確実性を増す中、福岡アジア文化賞の精神はますます重要になると思います。このような素晴らしい賞を設立し、私たちを表彰してくださった偉大なる福岡市と市民の皆様に心から感謝申し上げます。

Interview

質問：夫婦で長く研究を続けることができた秘訣を教えてください。

ベーカー氏：ディナーパーティーで知り合った時、二人の話が尽きず、ホストの友人が眠ってしまったほどです。私たちは研究に関して同じような興味を抱いていました。以来、この関係が続いています。

ポンパイチット氏：2人で社会や世界の変化を常に見て、人々の生活をどう改善すればいいか、考えてきました。ギブ・アンド・テイクの気持ちを持ち、お互いを尊敬し続けてきたからこそ、一緒に研究を続けられたのだと思います。

質問：今年は日タイ修好130周年です。両国が良い関係を築くために必要なことは何でしょうか。

ベーカー氏：両国はともに古い歴史を持つ仏教国です。共通点があり、多くの価値観を共有しています。それにより今まで良好な外交関係を築けたのだと思います。

質問：タイの魅力とは？

ポンパイチット氏：タイ人は情熱と思いやりがあり、感謝の気持ちを常に持っています。大きな危機や混乱を乗り越えてきた力は、逆に言えば世界を見る力、将来を見据える力ともいえます。大らかな気持ちで世界を見ているところがタイの強みです。

学術研究賞　王 名

社会問題の増えた中国でますます存在感を増すNGOに注視していきたい

秋篠宮同妃両殿下、髙島市長、福岡アジア文化賞委員会、ご来賓の皆様、福岡アジア文化賞受賞という栄誉を賜り、光栄に存じます。身に余る賞をいただき、選考委員の皆様には感謝の念に堪えません。中国のNGO研究に対して本賞の授与を決断されたことは、この実践向きの学問の重要性を明確に伝えるものであると御礼申し上げます。

この十数年間、中国では改革開放に伴って数多くのNGOが誕生し、さまざまな社会問題に立ち向かっています。私は、19年前、日本留学から祖国へ戻り、日本で学んだフィールド調査やガバナンス研究の知恵を生かして中国のNGO研究を展開してきました。これまで数多くの研究者および実践者とともにさまざまな調査研究を行い、環境保護をはじめ多分野に渡って社会ガバナンスに携わり、中国の市民社会の成長に取り組んでまいりました。

九州および福岡は古くから日中交流の拠点であり、日本の環境保護をはじめとする市民運動の発祥地です。私は日本の経験から学ぶため、水俣を何度も訪れました。現在の中国において、水俣学のような環境を守る実践向けの学問が重要だと考えます。

論語に「師曰く、三人行けば必ずわが師あり」という言葉があります。本日、私は運よく、大賞、芸術・文化賞受賞の3人の先生と同じ舞台に立つことができました。先生方をわが師として、日本、中国だけでなくタイやカンボジアの文化も一層学び、アジアの文化交流と市民社会のさらなる促進に向けて微力ながら積極的に貢献していきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。

In terview

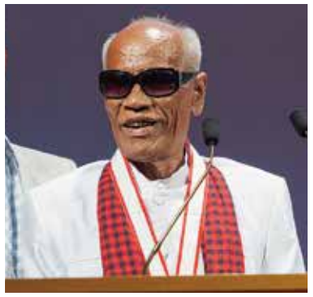
質問：NGOの重要性について、どのようにお考えですか。

王名氏：中国では、改革開放、経済発展に伴って政府及び市場では解決できない問題が出てきました。NGOには政府や市場を補完できる側面があり、国や地方、個々の利益を超えて活動できる存在として今後ますます重要かつ必要とされるでしょう。

質問：日本での研究、経験は中国で生きましたか。

王名氏：このような前向きな研究は一人でできず、皆と協力して行うことを日本で身につけました。NGOは政府や企業などと戦うばかりでなく、協力して活動しなければ、うまくいきません。そのような協力性、社会協働というものを日本で学べたことは私にとって大きかったです。

芸術・文化賞　コン・ナイ



ユネスコ登録と受賞を機に伝統音楽チャパイに関心が高まることを期待

秋篠宮同妃両殿下、主催者及びご来賓の皆様、そして福岡の皆様、コン・ナイと申します。

私は長年、カンボジアでチャパイという柄の長い楽器を使って弾き語りをし、より多くの人に聞いてもらうことだけを考えてきました。その結果、このような素晴らしい賞をいただくことができ、驚きを覚えると同時に大変喜ばしい気持ちです。この楽器や弾き語りを多くの方に知っていただくことができ、改めて感謝申し上げます。

最後になりますが、皆様の幸せとご健康を祈念し、感謝の言葉とさせていただきます。

『福岡での授賞式に向けて』弾き語りの歌詞

翻訳：福富友子氏（東京外国語大学非常勤講師）

私、コン・ナイ、
大変喜ばしい気持ちです
この場に出席する幸運に、
例えようもない喜び

素晴らしい、この授賞式において
福岡のかたがたに賞を
授けていただいて

良き作品のある者、
懸命に思考した者
すなわち社会の中で、
熟考し歩みを進めた者へ

みなさん、福岡では
3つの部門に賞をくださると
ひとつめに学術研究、
ふたつめに芸術文化

良い作品をもつ者に、
福岡から賞が贈られる
年に一度、芸術文化と学術研究に

今年の授賞式は、
老若男女のみなみなさま
この世でも貴重な、栄えある28回目

Interview

質問：チャパイは、日常の出来事や人々の感情、教訓、社会風刺などを歌詞に盛り込み、人々の生活に寄り添う音楽だそうですね。最近は、ロックやジャズ、オーケストラなど他ジャンルとも共演し、活動の幅が広がっていると聞きます。今後、この伝統音楽はどのように発展すると思いますか。

コン・ナイ氏：チャパイは、2016年、ユネスコの「緊急に保護する必要がある無形文化遺産の一覧表」に登録されました。また今年、この福岡アジア文化賞を受賞し、カンボジアの方々に喜んでいただくことができました。これらをきっかけに、将来、さまざまな人がチャパイに関心を持ってくれると信じています。

大 賞

パースック・ポンパイチット クリス・ベーカー

タイ／経済学、英国／歴史学

Pasuk PHONGPAICHIT & Chris BAKER

市民フォーラム

愛と喪失の物語：三つのタイ古典文学と、今を生きる私たちへのメッセージ

■2017年9月24日(日)／11:00～13:00
■エルガーラホール 8F 大ホール
■参加者／150人

〈第1部 基調講演〉

文学的作品が現代社会に問い掛ける愛の役割、協力の重要性、寛容性

愛、その抗しがたい魅力、喪失、その別離の悲哀。愛する喜びと愛を失う苦しみは、人間の心を揺らすもっとも偉大な力でしょう。タイの代表的な3つの古典文学をもとに、愛と喪失というテーマを深く説いていきたいと思います。

『スーソン・マノーラ』は、タイでは誰もが知っている物語です。半人半鳥の美しい生き物マノーラは、人間の世界でスーソン王子と深く愛し合い結婚しますが、政治的な陰謀によりそこを追われます。マノーラを探す旅に出たスーソンは、森を抜け、川を渡り、山を越え、長い年月をかけて再会を果たします。この物語は、いろいろな違いがあっても仲良く共存できることを人々に教えています。

『リリット・プラロー』は4000行もの長い詩です。若き指導者プラローと隣国の王女パーンとペーンは密かに愛し合いますが、両家は敵同士であったため、3人とも虐殺されてしまいます。しかし国王は、3人の亡きがらを一つの棺に安置して壮大な葬儀を執り行い、その遺灰を分骨してそれぞれの国で納骨します。虐殺が和解で終わるこの物語は、仏教徒の慈悲心を表しています。

『クンチャーン・クンペーン物語』は、地方の口承物語として発達した長編叙事詩。容姿端麗だが貧しいクンペーンと、裕福だが太って醜いクンチャーンという2人の男性が、美女ワントーンを巡って争う三角関係の物語です。情熱的な愛を表現するクンペーンと、安心と安らぎを与えてくれるクンチャーン。どちらか1人を選ぶことができない優柔不断な娘ワントーンに、王は死刑を宣告します。

この3つの作品の中心にあるのは愛ですが、単なる恋物語ではなく、深く大切なものが描かれています。愛の役割や協力の重要性をたたえた文学作品は数多くあり、人類の歴史の中でこれらの価値観が果たしてきた役割を、私たちは忘れてはなりません。

〈第2部 パネルディスカッション〉

●コメンテーター
宇戸 清治
（東京外国語大学名誉教授）

●コーディネーター
清水 展
（関西大学特任教授・京都大学名誉教授）

文化の違いを超えた両氏の共同作業はタイ古典文学に見る愛と協力そのもの

基調講演を受けて清水氏は、「お二人は身をもって、文化の違いを超えた愛と協力を続けてこられた。その息の合った掛け合いは、まるでシェイクスピアの朗読劇のようだった」と感想を述べました。

続いて宇戸氏が、基調講演の背景となったタイ古典文学について、時代区分と主要作品、大まかな特徴などを解説し、「中でも基調講演で取り上げられた3作品は傑出している」と述べました。宇戸氏自身も研究対象としている『クンチャーン・クンペーン物語』を「アユタヤ時代の政治、経済、社会、文化、風俗、民間信仰が実によく表れ、格言や金言の宝庫でもある重要な作品」と位置付け、両氏が長年かけて英訳した意義を高く評価。「経済学者・歴史学者という立場のお2人が古典文学に熱意を注ぎ、見事な共同作業によって文学研究者をしのぐ成果を出した」と、功績をたたえました。

また、会場からの「物語の中に森に逃げる場面があるが、タイでは森はどういう意味を持つのか」という質問に対して両氏は「危険が潜む場所であるとともに、社会や権力に抵抗する勢力が身を隠す場所」と説明しました。

学校訪問

■実施日／9月22日(金) 11:10～12:30
■会　場／福岡市立福岡女子高等学校

最初にパースック氏が自らの生い立ちを語りました。夜明け前に起きて蒸気船でバンコクの学校に通った子ども時代。経済学者を目指し、勉学に明け暮れた大学生活。ベーカー氏とともにタイに帰国してからのこと。「子どものころから文学、歴史、世界、社会、政治、人間に関心があった。今は、最初に好きになったものに取り組んでいる。それが文学」と語りました。

続いてベーカー氏が半生を振り返りました。子ども時代に本をたくさん読んだこと。大学に入る前に外国各地を旅したこと。大学で出会ったパースック氏とタイに移り住んでからのこと。今回の受賞については、「女性と男性、タイと英国、経済学者と歴史学者、さまざまな違いの中から前向きなプラスの結果を出すことに成功した」と喜びを口にしました。

生徒からの「自立した女性になるには？」という質問にパースック氏は「自分の価値を見出し、他人のことも理解するよう努めて」と助言。「世界で活躍するには？」という質問にベーカー氏は「常に新しいことを学び、変化を恐れないで」と答えました。

学術研究賞

王 名（ワン・ミン）

中国／行政学、NGO・市民社会研究

WANG Ming

市民フォーラム

環境問題における日中協力の課題と可能性：市民社会の現在と未来

■開催日／2017年9月23日(土)／13:00～14:30
■会　場／エルガーラホール 8F 大ホール
■参加者／150人

〈第1部 基調講演〉

経済成長を遂げた中国の環境汚染問題とその解決に取り組むNGOの発達

まず、中国経済急成長の裏、中国環境汚染の大きな課題について説明します。改革開放以来、中国は史上最大の経済成長を実現しました。その一方、大気・水・土壌の汚染、砂漠化、かん害・水害、生物多様性の破壊、ゴミ処理・食品安全・ダム建設問題、ガンや公害病の増加などの環境問題が爆発的に発生しています。大気汚染でいえばPM2.5の値が500を超える日があり、ガスマスクをして通勤する姿も見られました。

環境汚染が厳しさを増す中、それに問題意識を持ち、改善・解決に向けて行動するNGO団体も発達してきました。1988年に数千だったNGOの団体数は現在70万に上り、その中で環境分野のNGOは6689団体あります。

環境NGOの第一の活動は情報公開であり、代表的な団体は「IPE（公衆環境研究センター）」です。彼らはインターネットで水と空気の汚染地図を公開。企業とグリーンサプライチェーンを構築し、アプリを開発、ガバナンスの過程・結果を公開して政府や企業の環境情報、地域汚染源などを市民に知らせました。

水源地調査やダム反対運動などを行う「緑家園」、村民と一緒に水田保護を行う「淮河衛士」のほか、多くのNGOが植林事業、公益訴訟活動、災害救援、ゴミ対策、野生動物保護などに取り組んでいます。中国のNGOは日本に学ぶことが多いと認識し、日中環境交流を環境保護活動の戦略の一つだと考えています。私自身も中国のNGOや報道機関を連れて水俣を訪れ、著書などで日本のNPO活動を中国の人々に広めました。

2015年に環境保護法が制定され、中国は今後、環境問題において新たな局面を迎え、「環境問題の深刻化と複雑化」「法律制度の整備化」「中央と地方の政策の協力化」「市民と企業参加の活発化」が進むと考えられます。NGOにも「プラットフォーム化」「ネットワーク化」「専門化」「政府とNGOの協働化」という新たな動きが求められます。日中の協力も「資金支援から協力協働へ」「国ベースからコミュニティベースへ」「プロジェクトベースから問題ベースへ」「政府主導から民間主体へ」の転換が求められ、新しい挑戦を迎えます。しかし、それは市民にとって協力の良い機会となることでしょう。

〈第2部 パネルディスカッション〉

●コメンテーター
大塚 健司
（日本貿易振興機構アジア経済研究所（IDE-JETRO）新領域研究センター 環境・資源研究グループ長）

●コーディネーター
天児 慧
（早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科教授）

中国におけるNGOの今後の課題と日中の環境協力の可能性とは

天児氏は王氏の幅広いネットワークと活動力による功績を紹介し、日中国交正常化45周年の年に受賞した意味は大きいと称えました。大塚氏は、ジャーナリストらが立ち上がったという中国のNGO誕生の背景や若者による新しい動きを紹介しました。NGOと政府との関係を危惧する会場からの質問に、王氏は「今や政府だけでは解決できず、法整備が進む一方、若いリーダーが政府や企業から支援を受けている」と活動の変化を説明。日中の協力について「日本の環境汚染・公害問題の解決策は良きモデル。その経験と教訓を学ぶため市民レベルの協働が必要」と回答。天児氏は環境協力という新しいスタイルで良好な日中関係を築けるとの期待を寄せました。

学校訪問

■実施日／9月22日(金) 10:40～12:00
■会　場／西南学院大学

日本留学の経験のある王氏は、流ちょうな日本語で「私を考える」をテーマにこれまでの人生を学生に語りました。

王氏は高校入学と同時に兵役についたため高校に行けず、自学して大学進学したエピソードを披露。大学時代に改革開放の恩恵を受け、有意義な研究生活を送ることができ、その後、西安で教鞭を取って以来、教師生活が34年になると話しました。日本留学していた際、阪神・淡路大震災を機にNGOの活動に触れ、以降NGO研究に没頭したと振り返りました。また、NGO研究を20年以上続けられた理由、未来が見えず辛い時も勉強や仕事を続けられた理由、15年間に147件の政策提案をし、法制度の改正等に関われた理由について、それぞれ好奇心、堅持力、説得力によるものだと自己分析。永遠の好奇心、無限の堅持力、そして強い説得力が人生にとって大きなポイントだと話しました。文化大革命や改革開放など政治情勢が変化する中、未来に向けて勉強や研究を続けてきた王氏の話は興味深く、学生は熱心に聞き入っていました。

芸術・文化賞

コン・ナイ

カンボジア／音楽　KONG Nay

市民フォーラム

未来につなぐカンボジアの心：コン・ナイの語り物音楽の世界

■開催日／2017年9月23日(土)／16:00～17:30
■会　場／イムズ 9F イムズホール
■参加者／250人

〈第1部 対談〉

音楽とクメール美術にみる カンボジアの独特で豊かな芸術文化

●講演者
寺田 吉孝
（国立民族学博物館 学術資源開発研究センター 教授）

●講演者
久保 真紀子
（日本学術振興会 特別研究員PD）

●コーディネーター
寺内 直子
（神戸大学大学院 国際文化学研究科 教授）

寺田氏は、2005年、カンボジアを訪れた際に「カンボジアのレイ・チャールズ」と称されるコン・ナイ氏の新聞記事を目にしてすぐさま会いにいき、素晴らしい表現力に感激したエピソードを披露。その後、カンボジア音楽について写真や音を交えながら解説しました。

冒頭に人口の9割を占めるクメール人をはじめ、ベトナム人、中国人、21の少数民族が住むカンボジアの多様性を紹介。音楽は宮廷音楽や民俗音楽、宗教音楽から成る伝統音楽と、西洋から入ったポピュラー音楽に分類できると説明しました。宮廷音楽は文字通り宮廷で発達したもので、舞踊、影絵芝居、仮面劇等があると話し、民俗音楽には人生儀礼、精霊儀礼等があり、コン・ナイ氏の語り物もこれに属すると紹介。国の独特な文化と風習、そこで演奏される楽器と音色が披露されると、聴衆は興味深く耳を傾けていました。寺田氏は約200万人の国民が虐殺されたポル・ポト政権時代へと話を進め、9割の音楽家や舞踊家が命を落とした悲劇を語った後、コン・ナイ氏が生き延びて音楽を続けていることは奇跡だと喜び、今回の受賞を称えました。

デモンストレーションでは寺内氏、寺田氏とコン・ナイ氏の対談が行われ、語り物に使うチャパイという楽器や韻を踏み即興で作る歌詞についてコン・ナイ氏自ら解説。語り物の奥深さと氏の明るいキャラクターに魅了されて笑いが起こる一方、ポル・ポト政権の利点を歌わされた暗い過去を話し始めると会場は静まり返りました。

後半は、ヒンドゥー文化の影響を受けたクメール美術について、久保氏が解説しました。語り物で演奏される『リアムケー』はインドの一大叙事詩『ラーマーヤナ』を基にしたものであり、アンコールワット遺跡などの彫刻もこの叙事詩の影響を受けていると紹介。詩の内容は、ヴィシュヌ神の化身であるラーマ王が妻とともに国を追われて島に送られ、そこで残虐な魔物たちと戦い、再び都へ戻っていく冒険物語。話は時代とともに変化しながら語り継がれ、またカンボジアなど東南アジアに伝来。その土地にあう形に変異していき、各シーンは遺跡の彫刻や絵画になっていると紹介しました。

日本ではまだ、なじみの薄いカンボジアの音楽とクメール美術、物語の詳細を聞き、聴衆はコン・ナイ氏の語り物への関心、理解がより深まった様子でした。

〈第2部 ライブ演奏〉

第2部はコン・ナイ氏のコンサートが行われました。最初は久保氏が解説した『リアムケー』の一節。コン・ナイ氏は王位を辞したリアムが宮廷から森へ去っていくシーンを朗々と歌い上げ、聴衆は韻を踏んだ詩とチャパイの素朴な音色に耳を澄ましていました。その後、結婚する娘を送り出す母親の気持ちを歌った『カット・カン・スラー』、視力を失ったコン・ナイ氏の境遇を詩にした『目の見えない者の人生』と続き、この曲は今回のために新しく作った歌だと紹介。最後は陽気に盛り上がる『ラムリアウ』に聴衆から手拍子が送られ、会場が一体となった楽しいステージとなりました。寺内氏は復興目覚ましいカンボジアの現況を話し、伝統音楽が若い人々に継承されて欲しいとの願いを込めてフォーラムを締めくくりました。

学校訪問

■実施日／9月22日(金) 13:55～15:20
■会　場／和白中学校

和白中学校は、コン・ナイ氏の訪問を前に生徒でアジアウイーク実行委員会を作り、アジア諸国の歴史や文化を学ぶ「アジアウイーク」を実施。当日は全校生徒が集合し、委員会の進行によって交流会が開かれました。コン・ナイ氏が紹介され、全員で声を合わせカンボジア語で挨拶すると、コン・ナイ氏の顔に笑みがこぼれました。

寺内氏からカンボジアの歴史と音楽に関する説明を受けた後、コン・ナイ氏が受賞の喜びの歌や『リアムケー』などを演奏しました。そのお礼に生徒たちは全員で『ふるさと』を合唱。見事なコーラスをコン・ナイ氏に贈りました。

生徒から「一番大変だったこと」を問われたコン・ナイ氏は「視力を失くしたこと」と答え、「チャパイとの出会い」については「父からチャパイを買ってもらった13歳の時、お祭りで聞いたチャパイの音を思い出し、弾き語りで生活できるのではないかと考えた」と振り返りました。コン・ナイ氏は「日本語はわからないが、歌の美しさはわかる。皆と交流できて感動した」と改めてお礼を述べました。最後に生徒全員で校歌を斉唱し、コン・ナイ氏を囲んで記念撮影。和やかなひとときを過ごしました。

共催・協力企画

アジアの未来を拓く 九州大学の挑戦

歴史的にアジアとの交流拠点であった福岡に位置する九州大学は、これまでもアジアを対象にした研究・教育を活発におこなってきました。シンポジウムでは、大賞受賞者を基調講演者として迎え、九州大学がアジアの拠点大学の一つとして、アジアが今、直面している様々な課題を解決し、より良い未来を構築するために何ができるかを議論しました。

◆日時：2017年9月22日(金)　◆会場：アクロス福岡 4階 国際会議場　◆参加者：80人
◆主催：九州大学共創学部準備教授会　◆共催：福岡アジア文化賞委員会

基調講演

講師：パースック・ポンパイチット
経済学者（チュラロンコーン大学教授）【タイ／経済学】
クリス・ベーカー
歴史学者（独立研究者）【英国／歴史学】

現在の知識や学問の分野は1945～1960年に形成されました。しかし過去25年間の大きな変化により、その枠組みは崩れつつあります。知識の方向性をかく乱している要因には、近代化、テクノロジーの進化、経済学の破綻、自由民主主義の衰退など、単一の学問では解決できないさまざまな衝撃があります。

そのような状況の中で我々が今後検討すべき研究課題を4つ挙げます。①アジアで増えつつあるメガシティに関する新たな学問や技術。②気候変動や地震が環境や天然資源に与える影響や対処法を、包括的かつ国際的な観点で研究すること。③再び台頭してきた中国とアジア各国との関係を、古くから中国と文化的交流のある日本がアジア全域の視点から捉えること。④政治学において、国民国家よりも人々を研究の中心に置いた新たなアプローチを編み出すこと。

九州大学の新学部設置は、非常にわくわくします。私たちの話が、何か新たな視点を提供することができれば幸いです。

パネルディスカッション

「アジアの今とこれから - 大学が果たすべき役割とは - 」

パネリスト：

白石 隆
（ジェトロ・アジア経済研究所所長）

荒殿 誠
（九州大学理事・副学長）

清水 展
（関西大学特任教授・京都大学名誉教授）

竹森 活郎
（福岡市総務企画局国際部国際政策課長）

冒頭で荒殿誠氏が、九州大学とアジア各国の交流の状況、百周年記念事業として行われた東アジア環境研究機構の成果、設立を目指しているアジア研究教育機構の構想を紹介。「『アジアといえば九大』『進学・留学先なら九大』と言われるよう、アジアの研究や教育を先導していきたい」と、2018年4月の共創学部設置にかける意気込みを語りました。

続くパネルディスカッションでは、白石隆氏が「社会でさまざまな経験や苦労を積んだ後、問題意識を持って戻ってこられる大学に」と、教育の在り方を提案。清水展氏は「新学部発足までに議論を尽くすことが必要」と前置きした上で、「共創学部がやるべきは、異なる分野の人たちが議論、交流する場を用意すること」と提言。竹森活郎氏は、アジアのリーダー都市を目指す福岡市の取り組みや九州大学との連携を紹介し、「市の成長戦略を考える上で、九州大学は欠かせない存在」と、新たな挑戦に大きな期待を寄せました。

受賞者紹介および広報活動など

受賞者紹介

受賞者の母国をはじめ海外から記者を招き、受賞者の紹介や質疑応答を英語で行いました。

冒頭に髙島宗一郎福岡市長が映像を使って福岡市を紹介するプレゼンテーションを行いました。福岡市が都心と自然が融合するコンパクトシティであることを史跡や伝統文化、豊かな食文化とともに紹介。暮らしやすい都市として高評価を得ている魅力を伝え、市のアジア施策などについて話しました。

その後、受賞者紹介、記念撮影が行われ、質疑応答へ。「SNSによってアジア諸国の距離は縮まるか？」という質問に、受賞者は「SNSは市民交流、文化交流に役立ち、それが未来への懸け橋になる」と答えました。受賞の意義を問われると、受賞者は「研究や活動に光が当たったことに感謝」し、「受賞者同士が理解し協力する機会を得た」と喜びの声を上げました。また高校生記者から人生のモットーを聞かれると、「何事にもベストを尽くす」「人生は短い。自分に何ができるか考えて」とアドバイスを送りました。

【受賞者紹介】
◆日　時：2017年9月20日（水）
　　15:00～15:45
◆会　場：グランドハイアット福岡
　　サボイⅠ・Ⅱ

髙島市長によるプレゼンテーション、福岡市の魅力をPR

海外記者からの質問

市長による受賞者紹介

質問に答える受賞者

高校生記者たちからの質問

海外メディア向けプレスツアー

国際交流基金アジアセンターと共催で海外メディア向けプレスツアーを実施しました。

受賞者の出身国である、タイ、中国、カンボジアをはじめ、アジアの各国の記者が福岡を訪れ、福岡アジア文化賞や福岡市の魅力を広く取材、発信しました。

取材の様子

◆取材メディア：6か国10名
- ・Bangkok Post（タイ）
- ・Matichon Group（タイ）
- ・The Nation Newspaper（タイ）
- ・Life Week（中国）
- ・Southern Metropolis Daily（中国）
- ・Sabay News（カンボジア）
- ・Phnom Penh Post（カンボジア）
- ・D&D Press Japan（フィリピン）
- ・Jang Media Group（パキスタン）
- ・Independent（インドネシア）

◆日　時：2017年9月20日（水）～9月25日（月）
◆取材先：授賞式、市民フォーラム、学校訪問、FUKUOKA Growth Nextほか

海外報道記事

報道実績

【報道件数】国内：97件　海外：100件　計：197件　（2017年12月現在）

福岡アジア文化賞
歴代受賞者名鑑

FUKUOKA PRIZE　Roll of Honor
1990 - 2016

第1回 *1990*

創設特別賞

巴　金
BA Jin
（中国／作家）●
『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞

黒澤　明
KUROSAWA Akira
（日本／映画監督）●
「羅生門」はじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞

ジョゼフ・ニーダム
Joseph NEEDHAM
（英国／中国科学史研究者）●
中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞

ククリット・プラモート
Kukrit PRAMOJ
（タイ／作家・政治家）●
大河小説「王朝年代記」ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞

矢野　暢
YANO Toru
（日本／社会科学者）●
日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回 *1991*

大　賞

ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR
（インド／音楽家・シタール奏者）●

豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞

タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH
（インドネシア／歴史学者・社会科学者）

東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会科学者。

学術研究賞

中根　千枝
NAKANE Chie
（日本／社会人類学者）

アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、「タテ社会論」等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞

ドナルド・キーン
Donald KEENE
（米国／日本文学・文化研究者）

大著「日本文学史」はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

第3回 *1992*

大　賞

金　元　龍
KIM Won-yong
（韓国／考古学者）●

東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞

クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ
（米国／文化人類学者）●

インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞

竹内　實
TAKEUCHI Minoru
（日本／中国研究者）●

社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN
（フィリピン／建築家）●

東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

●は故人

第4回 1993

大賞
費 孝 通
FEI Xiaotong
（中国／社会学・人類学者）●

中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞
ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ
（マレーシア／経済学者）

マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞
川喜田 二郎
KAWAKITA Jiro
（日本／民族地理学者）●

ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞
ナムジリン・ノロゥバンザト
NAMJILYN Norovbanzad
（モンゴル／声楽家）●

モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

第5回 1994

大賞
スパトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL
（タイ／考古学・美術史学者）●

タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的位置づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞
王 賡 武
WANG Gungwu
（オーストラリア／歴史学者）

華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞
石井 米雄
ISHII Yoneo
（日本／東南アジア研究者）●

タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞
パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM
（インド／舞踊家）

インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第6回 1995

大賞
クンチャラニングラット
KOENTJARANINGRAT
（インドネシア／文化人類学者）●

インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞
韓 基 彦
HAHN Ki-un
（韓国／教育学者）●

独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞
辛島 昇
KARASHIMA Noboru
（日本／歴史学者）●

刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞
ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK
（米国／ビデオ・アーティスト）●

テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第7回 1996

大賞
王 仲 殊
WANG Zhongshu
（中国／考古学者）●

古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞
ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le
（ベトナム／歴史学者）

イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞
衞藤 瀋吉
ETO Shinkichi
（日本／国際関係研究者）●

中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞
ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン
Nusrat Fateh Ali KHAN
（パキスタン／カッワーリー歌手）●

イスラーム宗教歌謡カッワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回 1997

大賞
チェン・ポン
CHHENG Phon
（カンボジア／劇作家・芸術家）●

内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞
ロミラ・ターパル
Romila THAPAR
（インド／歴史学者）

独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞
樋口 隆康
HIGUCHI Takayasu
（日本／考古学者）●

フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞
林 権 澤
IM Kwon-taek
（韓国／映画監督）

韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回 1998

大賞
李 基 文
LEE Ki-Moon
（韓国／言語学者）

韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞
スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH
（米国／人類学者）●

タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞
上田 正昭
UEDA Masaaki
（日本／歴史学者）●

日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞
R. M. スダルソノ
R. M. Soedarsono
（インドネシア／舞踊家・舞踊研究者）

芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

●は故人

第10回 1999

大賞
侯 孝 賢
HOU Hsiao Hsien
（台湾／映画監督）

厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞
大林 太良
OBAYASHI Taryo
（日本／民族学者）●

日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究の泰斗。

学術研究賞
ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
（タイ／歴史学者）

斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞
タン・ダウ
TANG Da Wu
（シンガポール／ヴィジュアルアーティスト）

独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000

大賞
プラムディヤ・アナンタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER
（インドネシア／作家）●

『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

学術研究賞
タン・トゥン
Than Tun
（ミャンマー／歴史学者）●

厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー（ビルマ）史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞
ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON
（アイルランド／政治学者）●

世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞
ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat
（マレーシア／影絵人形遣い）●

マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン（影絵人形遣い）。

第12回 2001

大賞
ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS
（バングラデシュ／経済学者）

「グラミン銀行」を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞
速水 佑次郎
HAYAMI Yujiro
（日本／経済学者）●

市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞
タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE
（タイ／画家）●

タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞
マリルー・ディアス=アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA
（フィリピン／映画監督）●

民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002

大賞
張 芸 謀
ZHANG Yimou
（中国／映画監督）

現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞
キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA
（スリランカ／歴史学者）

スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞
アンソニー・リード
Anthony REID
（オーストラリア／歴史学者）

『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞
ラット
Lat
（マレーシア／マンガ家）

マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

大賞
外間 守善
HOKAMA Shuzen
（日本／沖縄学者）●

「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞
レイナルド・C・イレート
Reynaldo C. ILETO
（フィリピン／歴史学者）

東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞
徐 冰
XU Bing
（中国／アーティスト）

独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞
ディック・リー
Dick LEE
（シンガポール／シンガーソングライター）

シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004

大賞
アムジャッド・アリ・カーン
Amjad Ali KHAN
（インド／サロード奏者）

インド古典弦楽器「サロード」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞
厲 以 寧
LI Yining
（中国／経済学者）

中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞
ラーム・ダヤル・ラケーシュ
Ram Dayal RAKESH
（ネパール／民俗文化研究者）

ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞
ローランド・シルワ
Roland SILVA
（スリランカ／文化遺産保存建築家）

イコモス（国際記念物遺跡会議）委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

●は故人

第16回 2005

大賞
任 東 権
IM Dong-kwon
（韓国／民俗学者）●

韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞
トー・カウン
Thaw Kaung
（ミャンマー／図書館学者）

貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文献保存学の泰斗。

芸術・文化賞
ドアンドゥアン・ブンニャウォン
Douangdeuane BOUNYAVONG
（ラオス／織物研究家）

ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究家。

芸術・文化賞
タシ・ノルブ
Tashi Norbu
（ブータン／伝統音楽家）

ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第17回 2006

大賞
莫 言
MO Yan
（中国／作家）

現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。2012年ノーベル賞受賞。

学術研究賞
シャグダリン・ビラ
Shagdaryn BIRA
（モンゴル／歴史学者）

世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞
濱下 武志
HAMASHITA Takeshi
（日本／歴史学者）

アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞
アクシ・ムフティ
Uxi MUFTI
（パキスタン／民俗文化保存専門家）

「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第18回 2007

大賞
アシシュ・ナンディ
Ashis NANDY
（インド／社会・文明評論家）

臨床心理学と社会学を統合させた独自の方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞
シーサック・ワンリポードム
Srisakra VALLIBHOTAMA
（タイ／人類学・考古学者）

関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞
朱 銘
JU Ming
（台湾／彫刻家）

深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求める創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞
金 徳 洙
KIM Duk-soo
（韓国／伝統芸能家）

「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第19回 2008

大賞
アン・ホイ
Ann HUI
（香港／映画監督）

幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

学術研究賞
サヴィトリ・グナセーカラ
Savitri GOONESEKERE
（スリランカ／法学者）

南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞
シャムスル・アムリ・バハルディーン
Shamsul Amri Baharuddin
（マレーシア／社会人類学者）

民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞
フォリダ・パルビーン
Farida Parveen
（バングラデシュ／音楽家）

バングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第20回 2009

大賞
オギュスタン・ベルク
Augustin BERQUE
（フランス／文化地理学者）

欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞
パルタ・チャタジー
Partha CHATTERJEE
（インド／政治学・歴史学者）

正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきた政治学者・歴史学者。

芸術・文化賞
三木 稔
MIKI Minoru
（日本／作曲家）●

邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

芸術・文化賞
蔡 國強
CAI Guo-Qiang
（中国／現代美術家）

北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

第21回 2010

大賞
黄 秉 冀
HWANG Byung-ki
（韓国／音楽家）

韓国の伝統的楽器「伽倻琴（カヤグム）」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

学術研究賞
ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT
（米国／政治学者・人類学者）

東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

学術研究賞
毛里 和子
MORI Kazuko
（日本／現代中国研究者）

アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

芸術・文化賞
オン・ケンセン
ONG Keng Sen
（シンガポール／舞台芸術家）

現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

●は故人

第22回 2011

大賞
アン・チュリアン
ANG Choulean
（カンボジア／民族学者・クメール研究者）

「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明。さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みをつくったカンボジアを代表する民族学者。

学術研究賞
趙 東 一
CHO Dong-il
（韓国／文学者）

主著『韓国文学通史』全6巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及ぶ。韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。

芸術・文化賞
ニールズ・グッチョウ
Niels GUTSCHOW
（ドイツ／建築史家・修復建築家）

南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を学際的研究から高次の哲学的営為として昇華させ先導してきた建築史家・修復建築家。

第23回 2012

大賞
ヴァンダナ・シヴァ
Vandana SHIVA
（インド／環境哲学者）

開発やグローバリゼーションのもたらす矛盾を鋭く指摘し続け、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきた環境哲学者。

学術研究賞
チャーンウィット・カセートシリ
Charnvit KASETSIRI
（タイ／歴史学者）

アユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近現代史の研究成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行う東南アジアを代表する歴史学者。

芸術・文化賞
キドラット・タヒミック
Kidlat Tahimik
（フィリピン／映画作家・アーティスト・文化観察者）

途上国フィリピンに生きる者の矜持と文化帝国主義批判を独特のユーモアに包んで描く作品群を発表してきた、アジアの個人映画作家の先駆的存在。

芸術・文化賞
クス・ムルティア・パク・ブウォノ
G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono
（インドネシア／宮廷舞踊家）

幼少よりジャワ文化を深く学び、300年に及ぶ伝統的宮廷舞踊を広く世に紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展に尽力してきた、宮廷舞踊の継承者。

第24回 2013

大賞
中村 哲
NAKAMURA Tetsu
（日本／医師）

パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続け、異文化の理解と尊重を求める国際協力を実践。

学術研究賞
テッサ・モーリス＝スズキ
Tessa MORRIS-SUZUKI
（オーストラリア／アジア地域研究者）

民族や国家の境界を越え、新しい地域協力や市民社会の在り方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に多大な貢献を為しているアジア地域研究者。

芸術・文化賞
ナリニ・マラニ
Nalini MALANI
（インド／アーティスト）

映像や絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、世界が直面する今日的かつ普遍的なテーマに挑み続ける美術家。

芸術・文化賞
アピチャッポン・ウィーラセタクン
Apichatpong WEERASETHAKUL
（タイ／映画作家・アーティスト）

民話や伝説の中に個人の記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像話法で世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている気鋭の映画作家。

第25回 2014

大賞
エズラ・F・ヴォーゲル
Ezra F. VOGEL
（米国／社会学者）

戦後アジアの政治経済社会の変動や、アジアの新工業経済地域（NIEs）の先駆的な研究に業績をもち、国際関係に関する冷静で重みのある提言を行う東アジア研究の権威。

学術研究賞
アジュマルディ・アズラ
Azyumardi AZRA
（インドネシア／歴史学者）

イスラームの宗教・文化の深い理解に基づき、多元的で調和ある市民社会の形成に尽力し、異文化間の相互理解に貢献するパブリック・インテレクチャル。

芸術・文化賞
ダニー・ユン
Danny YUNG
（香港／文化クリエイター）

多数の斬新な舞台作品を発表する一方、文化政策や芸術教育にも取り組み、アジアと世界、伝統と現代を繋ぐ多彩な活動でアジアの芸術文化を牽引する文化クリエイター。

第26回 2015

大賞
タン・ミン・ウー
Thant Myint-U
（ミャンマー／歴史学者）

グローバルな視点からミャンマーの歩みを綴る傑出した歴史家であるとともに、歴史的建造物の保存や持続可能な都市計画に取り組み、自国の平和創造をめざす知的指導者。

学術研究賞
ラーマチャンドラ・グハ
Ramachandra GUHA
（インド／歴史学者・社会学者）

民衆の側に立った「環境史」の地平を切り開き、また、多様性を抱える大国インドの複雑な歴史を丁寧に辿り民主主義の実像を描いた著書でも知られる、インドを代表する歴史家。

芸術・文化賞
ミン・ハン
Minh Hanh
（ベトナム／ファッションデザイナー）

ベトナム固有の少数民族の刺繍や織物を融合させた現代的なデザインを創造し、若手育成や市場開拓に取り組みながら、ファッション文化の発展に貢献するデザイナー。

第27回 2016

大賞
A.R. ラフマーン
A. R. RAHMAN
（インド／ 作曲家・作詞家・歌手）

民族性豊かな南アジアの伝統音楽と西洋のクラシック音楽、現代の大衆音楽を大胆に融合させた個性的な楽曲で、映画音楽の新境地を開拓する世界的に有名なインドの国民的アーテイスト。

学術研究賞
アンベス・R・オカンポ
Ambeth R. OCAMPO
（フィリピン／歴史学者）

著書やメディアを通した発言等を通じ、フィリピンの歴史をわかりやすく伝え、市民の国際感覚の育成に寄与するなど、フィリピンの学術・文化・社会の発展に大きく貢献している歴史学者。

芸術・文化賞
ヤスミーン・ラリ
Yasmeen LARI
（パキスタン／建築家・建築史家・人道支援活動家）

数多くの歴史的建造物の保存修復活動や、地震や水害等の災害に対して低コストで環境にやさしいシェルターの提供を行うなど人道支援活動にも尽力した、パキスタン初の女性建築家。

●は故人